はじめに

理論総括班の課題は、非文字資料とは何かを考察し、非文字資料研究の方法を整序し、非文字資料の体系化への筋道をつけ、さらにそれが人類文化の研究にとってどういう意味があるかを明らかにすることにある。非文字資料のように、これまで自覚的かつ意識的に取り上げられることが少なかった資料を対象とする研究の場合、なによりも個々の非文字資料に即した個別的研究の蓄積を前提にして、初めてそのような課題への取り組みが可能になる。もちろん、少ないとはいえこれまでなされてきた研究の成果を検討することや抽象的レベルでの考察も必要であろう。理論総括班は、本プロジェクトにおいて推進されてきた個々の非文字資料の研究状況を検討しつつ、そうした作業も行ってきた。

しかし、理論総括班としては、あくまで自分達の経験、研究成果に依拠しつつ、その一般化を中心的課題として自らに課してきた。したがって、本班は、本プロジェクトの各班、各研究グループの動向に注目し、適宜各班・グループからの報告を受け、それを素材として考察を進めるという方向を選択した。また、各個別研究班・グループが、自らの経験を理論的に整序し、問題提起することを薦めてきた。

本論集に収載した3つの論文は、少数とはいえ、そうした活動の成果である。的場論文は、非文字資料の認識論的基礎を哲学史あるいは認識論史的観点から論じたものであり、非文字資料の研究成果が人類の知的財産として認知されるために不可欠の課題に挑んだものである。河野論文は、的場論文への批判の形をとっているが、自らの研究の経験を普遍化し、非文字資料研究の具体的進展に資するために執筆されたものである。さらに、橘川論文は、本プロジェクトの全体状況を鳥瞰しながら、「人類文化研究のための非文字資料の体系化」という本プロジェクトが掲げた課題への理論的諸問題を整理し、さらなる理論形成へ展望を開くことを試みたものである。

「ミネルバの梟は夕暮れに飛び立つ」ということわざがあるように、体系的理論の形成は、その領域の研究が、ある程度完成に近づいたときにのみ達成される課題であるかもしれない。非文字資料の本格的、体系的研究は、本プロジェクトにおいて初めて取り組まれた課題であり、完成に近づいたとは到底いえない状況にある。一般的にいって、人文諸科学の分野においては、基礎的データの収集・整理に膨大なエネルギーと時間を要することはいうまでもないことである。本プロジェクトもその例外ではありえない。体系的理論形成への意欲が低かったわけでも、そのための努力が足りなかったわけでもない。研究の進展段階が、容易に一般化を許すような段階に至っていないことが、本論集の限界を画したという事情も指摘しておかなければならないだろう。

ともあれ、本論集が、非文字資料研究の今後の進展に寄与することを期待しておきたい。

橘川　俊忠